

栃木県農業試験場ニュース

No.387 令和元(2019)年9月

研究成果

いちごのパッケージセンター利用者へのアンケート調査結果について

いちご栽培は、出荷調整作業が労働時間の約4割を占めます。労働軽減を図るため、一部の農協では、パッケージセンターが導入されています。本調査では、パッケージセンターを利用した場合の労働軽減効果を明らかにするため、農協のいちご生産部会員にアンケート調査を行いました(表1)。

アンケートは、生産者の経営概要、パッケージセンター利用の有無、パッケージセンター利用による労働環境面の変化等について、調査しました。

今回の報告では、パッケージセンターを導入している農協の生産部会員のアンケート結果(有効回答数122)について報告します。

【パッケージセンター利用による生産環境面の変化】(複数回答)

「出荷調整作業が楽になった」(78%)が最も多くを占め、以下、「栽培管理に時間がとれる」(73%)、「高齢になっても続けられる」(39%)との回答となりました(図1)。パッケージセンターの利用により、出荷調整作業が楽になり、出荷調整を行っていた時間を栽培管理に充てることができるようになったことが推察されました。

【パッケージセンター利用による経営面の変化】(複数回答)

「ゆとりが出来た」(92%)との回答が最も多くを占め

した(図2)。未利用の生産者よりも、平均栽培面積が大きいにもかかわらず、労働時間が軽減されたことが推察されました。

なお、「収益が下がった」(10%)と回答した生産者のうち8割が「ゆとりが出来た」と回答していることから、労働時間の軽減が重視されていることが推察されました。

【パッケージセンター利用によるいちご栽培引退までの延長年数】(複数回答)

パッケージセンター未利用の場合と比較して、いちご栽培年数をどの程度長く続けられるかを聞いた設問では、「5年」が最も多くを占め(59%)、以下、「10年」(29%)、「3年」(8%)との回答となりました(図3)。「5年」及び「10年」を合わせると、約9割となり、パッケージセンターの利用による変化への回答「高齢になっても続けられる」(39%)と併せて、パッケージセンターの利用により、いちご栽培引退までの年数が延長されることが推察されました。

今後、パッケージセンターを導入していない農協の生産部会員のアンケート結果などについて、別途報告を予定しています。

(いちご研究所・企画調査担当)

表1 アンケート調査の概要

配布時期	平成 30(2018)年 10月 ～平成 31(2019)年 2月
配布対象	農協のいちご生産部会員
配布数	1427
有効回答数 (有効回答数を基にした回収率)	366 (25.6%)
パッケージセンターを導入している農協のいちご生産部会員の有効回答数 (有効回答数を基にした回収率)	122 (15.3%)

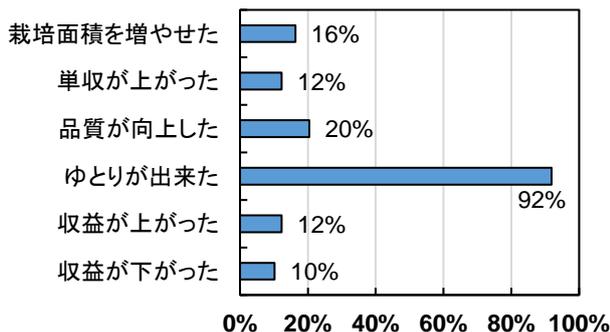


図2 パッケージセンター利用による経営面の変化 (回答者数 49、複数回答)

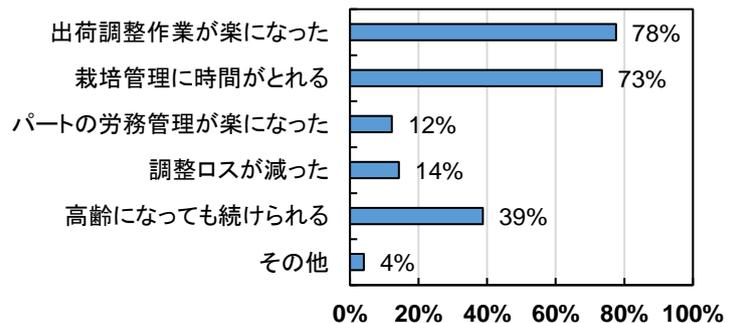


図1 パッケージセンター利用による生産環境面の変化 (回答者数 49、複数回答)

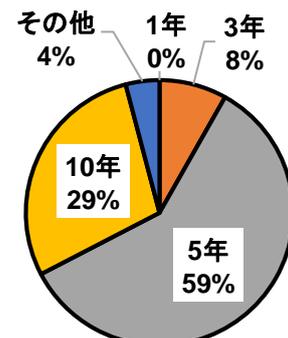


図3 パッケージセンター利用によるいちご栽培引退までの延長年数 (回答者数 49)
※パッケージセンター未利用の場合と比較して、栽培年数をどの程度長く続けられるかの設問回答結果

ニラのネダニ類に対するハウス密閉と土壌被覆による高温処理の防除効果を実証しました

県内のニラ産地では、ニラの地下部を加害することで減収を招くネダニ類の被害が問題となっています。背景には、連作によってネダニ類の密度が高くなっていることや、ネダニに対して使用できる農薬の種類・系統数が少ないことがあります。当研究室では、ニラ株の温湯処理による防除法を開発しましたが、処理に専用の装置が必要なことや、大量の湯の確保が困難なほ場があること等、現場普及するための問題点が明らかとなりました。そこで、現場で容易に実施できるネダニ密度低減技術として、作付け

終了後のハウス密閉と土壌被覆による高温処理の防除効果を実証しました。

その結果、高温処理を実施した試験区におけるネダニ密度は、処理開始1週間後で処理前と比較して約8%に、2週間後には約1%にまで減少し、高い防除効果が認められました。また、処理期間中の株元深さ5cmの最高地温は、無処理区では30℃でしたが、試験区では50℃以上に達しており、ネダニ類が十分に死滅する温度条件となっていました。**(病理昆虫研究室)**

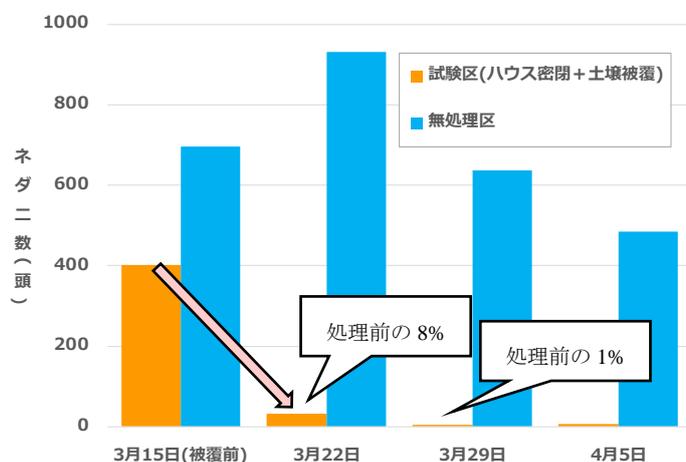


図 ニラ根圏におけるネダニ密度の推移

※ニラ 10 茎+根圏土壌 500ml あたりネダニ頭数を調査した



写真 処理中の試験ほ場とネダニ類

トピックス

なしの収穫が最盛期を迎えています



現在、農業試験場ではなしの収穫の最盛期を迎えています。

幸水が終わりに近づき、これからは豊水の収穫が始まります。

なお、本県育成品種「にっこり」は、10月から収穫が始まります。**(果樹研究室)**

試験の紹介

新品種を識別できる DNA マーカーを開発しています

本県では、水稲原種の安定生産のために、生産した原種の DNA 鑑定を行っています。今年度は、平成 30 年に品種登録出願された水稲の酒米新品種「夢ささら」を識別できる新たな DNA マーカーの開発に取り組みます。また、現在水稲

原種の DNA 鑑定に用いている DNA マーカーを再度整備し、データベースの更新を行い、原種生産ならびに育成者権保護に活用していきます。
(生物工学研究室)



写真 「夢ささら」原種圃場

試験の紹介

キャベツ品種比較試験

現在、本県では「園芸大国とちぎづくり」を目指し、水田での露地野菜作付けを推進しています。そのような中、一部地域では加工・業務用として、比較的栽培が容易な冬春どりキャベツ生産が開始されていますが、二毛作地帯においては麦栽培と作期が重なるため、導入が難しくなっています。

そこで、二毛作地帯においても作付け可能な夏秋どりキャベツの極早生～早生の寒玉系品種 9 品種を用いて、優良品種選定を行っています。8 月上旬に定植、10 月上旬に収穫し、収量や加工適正等について調査する予定です。

(野菜研究室)



写真 8/13 (定植 12 日後) の様子

農業試験場公開デーを開催しました

今年8月24日(土)に公開デーを開催しました。昼過ぎは一時雨となってしまいましたが、1,800人の方に来場いただき、賑わいました。

公開デーでは、日頃の試験研究成果のパネル展示やミニセミナーでの発表、各研究室で趣向をこらした体験イベントがあり、農業者だけでなく、お子様

や消費者にも現場を楽しみながら知っていただけたと思います。また、毎年多くの方々に楽しませていただいている生産物販売は、今年も大盛況で早々に販売が終了しました。

ご来場ありがとうございました。

(公開デー実行委員会)

ミニセミナー



若手研究員が農業に関するトリビアや暮らしに役立つ情報をわかりやすく楽しく解説しました。

最先端トマト温室の見学



今年3月に建ったばかりの最先端トマト温室には、多くの方が見学にいらっやいました。

特A米3品種食べ比べ



栃木県で最高賞の特Aを獲ったお米3品種の食べ比べをしました。

果樹園の農機具展示



見たことのない農機具が大集合で子供たちは大喜びでした。

畑の生き物探検隊



捕った虫は、詳しい話を研究員に聞いたり、顕微鏡で観察することができました。

なかっぴー



なかっぴーやとちまるくんも遊びに来て公開デーを盛り上げてくれました。ありがとう！

皆様の声をお聞かせ下さい!!

発行者 栃木県農業試験場長
 発行所 〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1,080
 Tel 028-665-1241 (代表) Fax 028-665-1759
 MAIL nouyou-s@pref.tochigi.lg.jp

発行日 令和元(2019)年9月1日
 事務局 研究開発部
 Tel 028-665-1264 (直通)
 当ニュース記事の無断転載を禁止します。